

茶碗割

繫に場敷覺えの巧の者、お茶漬さらく遣つて却ける手際は、逆も及ぶ所でないのであります。尤も、是非遣らなければ成らぬと云ふ手詰に及んだ事ならば、私とても思切つて、目を刺したり、鼻の頭に皺を寄せたり、大上段に構へたり、悲い所は鼻聲を出したり、身振聲色入で大いに遣らぬでもありませんが、それは吾と吾身で冷汗淋漓であるから、聴いて御座る諸君は定めて萬斛の冷汗を搾らるゝであらうと想ふと、有繫に良心に慙ぢまして、未だ其迄の悪事を犯すほどの度胸は無い。畢竟其處まで突込んで遣り得ぬから、勢ひ興味索然として、折角面白い譚も腹が脱けて面白くなく成る。其道の者なれば十五日の續物にして毎晩後を牽せるのを、唯一時間位で手短に片付けて了ふ。之を引張つて徑行を長く、緯々として贅を容れて述べる裏に妙味が有るので、其が又手際であります。其の手際が有る程ならば、各位の貴重なる日曜日を奪つて、剩さへ遠路雨天の處御足勞を掛け、又手前方よりは鹿末ながらお茶菓子を獻じて、而して殊更に氣の毒な思を致す必要は無いのであります。何に爲ろ、此の爲體では、例々と門口に立看板を出した所で、兎に角入は有つても、十分と席に居る者は先づ有りません、要するに之を神妙に聴いて貰はうと云ふには、義理の柵で足を止めるより外は無いので、平生最もお馴染の深い諸君を請じ

茶碗割

たので、所謂親類だけに二段聞きこの本文に従つたのであります。甚だ御愁傷の次第で。扱私のは茶碗割と題するので、今より約そ二百餘年前、頃は元祿年間の物語。能く今日でも言ふ事であります。昔の人は物堅い、律義であつた、其から見ると今の人間は實に悪黠い。成程悪黠い、昔は斯うではなかつたらう、甚麽に朴訥であつたかと思へば、五十年前に書いた物などを見るに、猶且昔は世の中が優長で、人間が朴訥であつたとしてある、おや、未だ先が有るわいと思へば、百年前の書物を見ると、昔は世の中が優長で、人間が朴訥で、暮し好かつたとしてあるから、未だ先が有るので、朴訥と云ふものは滅法に長い物と考へる。それから三百年五百年前の今から見れば朴訥の、朴訥の、其の又先の朴訥の古人が言置いた事を見るに、猶且昔は人間が朴訥であつたと嘆息して居る。之で推した日には、何處まで行つても朴訥の先が知れない、恐らく天の磐戸へ行つて撞着つて居るのでありませう。然しながら今日よりは天明、天明よりは元祿と、比較的人は淳朴であつたに違無い。なれども、試に史を案ずれば、既に五百年前、千年前にして、末世の今日から仰いで及ばざる大偉人、大豪傑が頻々と輩出して居ります。成程一般の人情は朴訥でありましたらうが、其中に又傑出して鋭いのが幾多も居たので。

他は天保時代だなど言つて馬鹿に爲るが、天保時代は扱置き、鈍い顔をして派手な物を着て居た元祿時代と雖もなかく悔り難い。活馬の目と云ふ物は何の薬に成るか知らぬが、其の時分から類に抜いたのであります。

處は大阪であります。操芝居の行はれたる頃で、人形は巧機細工古今の名人竹田近江椽の作、淨瑠璃は竹本筑後椽の語物と云ふのであるから、櫻の花に梅が香を添へたやうな者で、此上は無い。而も初春の興行でありましたから非常の人氣。日毎に割返るばかりの大入で、午前にはもう場處は無い。其處へ今入つて来たのは主従四人の客で、大町人の乳母と見えたのが六歳ばかりの玉のやうな女の兒を抱いて、供に連れたのが小間使に陸尺。入りは入つたものゝ、立錐の地も無い光景であるから、惘然と突立つたままに類に胸して居たか、何處に割込む所も無し、然うかと云つて、折角入つたものを見ずに出るも残念と、進退並に谷つて、酷く途方に暮れて居りました。

此時西側の棧敷の五間目から此方を目掛けて手招を爲る者が有る。乳母は之を見付けましたが、知つた顔でもないから、自分と呼ぶのではなからうと思つて居ると、猶類に招く。其の様子が如何にも此方を招くのであるから、左に右行つて見やうと、主従打連れて棧敷の裏階子を昇つて其の場處へ顔出を爲ると、猶且見えず知らずの他人。國侍と見えて然る可き人體の武士、内儀を連れて、下女、仲間、草履取と五人の一座。乳母を見ると彼の侍が温顔に聲を掛けた。

「さあ、直とはへお入り、決して遠慮には及ばんから、いや、一向御親近では御座らんが、場所が無うて御難儀と見受けたに因つて、此は此通り寛縦致して居るゆゑお招き申したのじや。」

と提重、酒筒などの取散したるを片付け、自分達の席を詰めて、猶夫婦言を揃へて深切に薦めるので乳母は渡に舟とお辭儀無しに、同勢其へ割込んだのであります。然るに彼の侍夫婦は餘程の子煩悩と見えて、「好いお子じや。」「蕾の花のやう。」「お可羨しい。」「子に増す實は無い。」「なご乳母の膝に居る子を見て、其の談計り。菓子などを取寄せて愛想を爲る、後には馴染せて膝に抱取る、夫婦が交迭機嫌を取つて遊ばせると云ふ始末。愆して下にも置かず可愛がらるゝのであるから、子も亦兩箇に懐いて、翁さん、媪さんと呼ぶのを、夫婦は目を織くして悦び、乳母、小間使、陸尺には酒を勧め、菓子を與へて、是亦懇に待すのであります。其内に狂言も打ち出しと成る、夫婦は此兒に名残を惜むこと一方ならず、旋て別際に彼の

侍、

「今日けふは不圖ふからずもお目に掛つて、兼々子無きを悲む夫婦の者、舞臺の人形よりは此の愛らしいお鶴さまを對手あいてについで覺えぬ好い保養を致した、然し何も愛相が御座らんで、歸途かへりには玩具もてあそびなど買うて進ぜたく思ふたなれど、道も違ふ事であれば、此方こなたが好いやうに是でお鶴さまの氣に入つた物を求めて上げてくれるやうに。」と金子を紙に捻ひねつて、乳母の前に差置いた。四人の同勢が棧敷に入れて貰つて馳走に成り、それで牛日子供の傳ついでを爲てくれて、歸には家苞みやげを買へとて又金子。是が親類でも叔父さんでも何でもない、不見不識みずしらずの他人であるから、如何な事にも是は手は出せない、若し出したらば乞食こじきの心。乳母は眞赤まじかになつて辭退を致した。侍はいつかな聽入れぬ。

「此方こなたに進しんぜるのではない、お鶴さまに進しんぜるのじや。是が金子であるから左や右言かういひる、玩具もてあそびであつたらば得もや置いて逃げはなさるまい。先刻家内が此の御子に、歸途かへりには好い物を買うて上げるとお約束を致した。子供には假初かりそめにも嘘うそを言うて聞かすものでない、町家ちやうかの事は知らぬが武家ぶけの作法さばよは其通ぢやに因つて、是は是非に納めて貰はねばならぬ。」

未だ否いなと言はゞ、今度は露出ちやだしの延金のべをも戴かされさうな氣色けしきであるから、乳母も、く件の金子を受けて、主人しゅじん事は今橋筋いまはしすぢの兩替屋りやうがへ小松屋こまつや右衛門えもんと申す者なれば、那あの邊お通り掛りの節は是非お立寄を願ひます。いづれ主人お目通りを致しまして、改めて此の御禮を申し上げますと、木戸口わかれを告げて立還りました。

此の紙に捻つたのを披あけて見ると二歩入つて居る。當節でも子供衆にお玩具をと言つて包んで遣るには、五十錢ぐらゐが相當、二百年前の二歩は大したものであります。乳母の年俸ねんばうぐらゐに當るかも知れぬ。箇程の金子を仿はしたのやうに扱ふのは歴々れきくの身分でなければ出来る事でない。然やうに立派な御方御夫婦がお可羨うらやましがつたお鶴様の事を、早く内へ歸つてお聞せ申したい。御主人の御喜は目に見るやうなど急いで復もたる。内では心配の處。二三日子供が疳かの起つた氣味であるから、其頃の流行醫りうかうい、長崎伊白ながさきいぱくの方へ診せに遣つたのが、はや日の哺くれると云ふのに一人も還つて來ぬので、今頃迄何處に道草を食つて居るのかと心當こころあたりへ人を出して居る最中。

其處へとやくと歸つて參つたから、好い程に小言も出た後で、實は些ちよつと操あやつりを覗きに入りました處、箇

様態々の次第と侍の話を致しますると、案の如く親達の喜悦は格別。然しながら、お近親でもない御方に御馳走を受けたる上に金子まで戴くとは、甚だ以て所以無き事、此儘には濟されぬから、早速翌にも御禮に出なければならぬ、而して御住所は何方と伺つた、と主に訊ねられて、乳母は惕然と思つた。

「お宿は何方だ。」

「はい、あの、其は……………」

「おま、お住所書でも戴いたか。どれく見せなさい。」

「いええ。つい憶能致して居りまして、つい、あの、何で、伺ひませんで御坐いました。」
之を聞くと喜右衛門ぐつと睨んで脂下つた。

「何、お住所を伺はなかつた？」

「お前も好い氣な者だ、當年幾歳に成りますえ。」

「丑の廿八で。」

「黙んなさい。私も小松屋喜右衛門だ。娘を始お前方まで四人の同勢が鼻を並べて、のう縁も由縁も無い御

方に散々御馳走に成つた擧句が、子供にお手厚いお家苞まで戴き放しに爲て、それで濟むものか、奈何か、考へて見なさい。御馳走に成つたはお前方でも、主人の喜右衛門が御禮を爲なければ成りません、御住所が

知れないから可いわでは濟みません。小松屋喜右衛門も歴とした町人、世間に對して恥を掻く事は先祖からの

酷い禁物です。」

頭粉碎に吃つたから、乳母は一縮に成つて、

「誠に行届きませんで、取だ不重寶を致しました。旦那様、どうぞ御勘辨遊ばしまして。」

「成りません！ お鶴の傳は其方除で、自分の保養に實が入るから、這麼阿房らしい不出来も有る。いゝに

勘辨は成りません。私が其のお武家にお目に掛つて、直々お禮を申すまでは、了簡は爲ませんから、然う思ひなれ。」

重々乳母の落度ではあるが、餘り碣碣云つて氣を悪く爲せたなら、戶外へ出た時可愛い娘に寇を爲れやうか、と有樂に女は女だけに内儀は其處等を案じて切に執成したが、喜右衛門なかく和々のではない。

乳母は散々の首尾で引退つたが、考へて見るほど此の小言無理でない、誠に申譯も無い不念。是非今一度彼

の侍に回合つて、其をお詫の種に爲なければ成らぬと思案したから、翌日からお鶴を連れて遊びに出る度、八方に目を配つて、侍の通るのを一人でも見道さぬやうに張番を爲ると云ふ始末。

「媼やさん、助太刀を頼むのかい。」 などと若衆に冷される。

丁度四日目の午過、雪が片々と落ちて来たので、乳母は急いで内の門迄来ると、後から衝と若衆、草履取を連れて乗物が行過る、何氣無く見送る途端に、駕籠の窓から此方を眺める顔は彼の侍。やれ、嬉しやと思ふ間に秀々と息杖を速めて、乗物は六七間も行く。乳母は大な臂を振つて追掛けました。

「お、先日のお乳母、お鶴さまの虫氣は奈何じやな。乃翁を見て、今日は羞含んで御座るの。」

「さあ、お鶴さま、お時誼を遊ばしませんか。此中は大勢が御馳走を戴きまして難有う存じます。主人に申聞けました所、早速お禮に伺ひませんければ相済みません、と筒様に申しまして、其節ついお住所をも伺はずに復りました私の不重寶を謹らしまして、途中でお見掛け申したなら、見苦しい處ではあるが、是非ともお立寄有るやうに、其方から屹とお願ひ申せ、と堅く申付つて居ります事で御座いますから、勝手にま

しう御座いますが、どうぞ些とお立寄を願ひまする、直那に見えませぬのが主人の宅で御座いますから。」

「いや、折角ではあるが、今日は些と急用有つて、然うしては居られぬゆゑ、いづれ期して又お尋ね申す。」

「いえ、どうぞ些とお寄を、御迷惑でも御座りませうが、お手間は取せ申しませんで御座います、お駕籠のまゝで宜いので御座いますから、店頭までなりとお越を願ひまする。」

「いや、参れば又其でも濟まん事ゆゑ、今日は赦して貰ひたい。」

類に推問答を爲て居ると、小松屋からは斜向に見通の往來であるから、直に飛んで来たのが手年の久七、

「はッ、主人名代にお出迎に出まして御座りますが、喜右衛門些とお目通を願ひたく存じまするので、御通行の處をお引留め申しまして、甚だ無様では御座りますが、お茶一つ召上りまするやうに。」

と乳母俱共に左右から纏つて放さぬので、彼侍も没義道に駈抜けて了ふ譯にも行かず、然やうなれば折角のお言に従つて、と其から引回して小松屋の前に駕籠を下す。

喜右衛門は飛んで出る、奥へは注進が行く、先々此方へと手を取らぬばかりにして座敷へ案内致しまする。

それ、お茶よ、お菓盆よ、猫は那方へ遣んなさい、さて、はや始めましてお目通を仕りまする、と是から形の

如く初對面の挨拶が有つて、先頃の禮を惡に述べます。入替つて又内儀より丁寧の挨拶、恁云ふ口上を言せては女の方が巧いから、男は動もすると應ひかねる。侍は此の二番手に會つて少く羨んで居ると、又奥から躡れて、下座に並んだのが、當年七十六に成る盲目のお祖母さん、是が焼野の雉子などの比でない大のお鶴秘藏でありますから、お座敷へ出へき體ではないが、外ならぬ御客様の御出ゆる、お鶴に成代つて駕とお禮が申上げたいと云ふ特命全權公使のお祖母さん、此の隠居が古今の口上言ひで、用意周到に長々と言を盡して、念入別製の挨拶が有つたので、彼の侍も幾と閉口した状。

一つ二つ話を爲て居る内に盃が出る、吸物が並ぶ。何は無くともお親近の證に一獻と、夫婦交るく、勸める。

「いや、誠然やう致しては居られぬのゆゑ、今日はどうぞお管ひ下さらぬやうに、是では却つて迷惑致します。」

「然やうでも御座りませうが、祖母が申付で充らぬ物ながら支度も致しました事で御座りまするゆゑ、左に右お箸をお着け下されうなれば難有い仕合で。」

と今漸く酒の始つた處に、店の者が来て、

「ええ、唯今壹丁目の唐物屋小八郎と申す仁が見えられました、此方にお出のお客様に至急お目通が願ひたく、先程より處々方々とお跡を追ひ、漸く御處を知つて罷出ましたが、御歸をお待受致しましては用事が整ひませぬので、お出先へ伺ひました、と箇様に申されます。」

「あゝ、唐物屋小八郎が見えましたか。至急に目通が爲たいと申すは、如何なる都合に成つたのであらう。」

と侍は小首を傾けて考へて居る。喜右衛門聞いて、

「何ぞ火急の御用で御座りまするなれば、貴方にお差支無くば、其仁を是へお通し遊ばしましては如何で御座りまする。若又御内談でも御座りますれば人拂を致しまするで。」

「いや、是にて會ひまして一向差支無い者で御座るが、手前も今日始てお宅へ出まして、他の用事の爲にお座敷を拜借致すと申すは、如何にも失禮の至。然し、急用と申せば、是より中座を致して宿に歸らねば相成らず、折角箇様に御饗應の所を、其も心外に存じまするゆゑ、然らばお言に甘へ、どうぞ其者を是へお通しあるやうに。」

「決して御遠慮には及びませぬ。直にお連れ申せ。」

茶碗割

と主の指圖さしずに店みせの者は出て行く、旋やがて入つて來たのは道具屋と見えまして、持つたる風呂敷包を其に置いて、次の間から一同に挨拶を致し、さて侍に向ひまして、

「早速申上げますが、一昨日御覽に供へましたる彼の茶碗は、百八十兩なればお買上に成りまする趣、先方へ通じましたる處、右の直段なれば京都の瑞齋すゐさいと申す仁も御望との事で、いづれへなりとも御話の早く纏りまする方へお譲り申したいと申されまして、代金のところを甚だ取急がれまするので、若し今日中に御相談が出来ませんやうで御坐りまするならば、今晚の上り船にて京の飛脚ひさやくが出来まする事ゆゑ、其に品物を渡しくれるやうにと申して参りましたので、御都合は如何で御坐りませうか、御買上に相成りまするならば、唯今代金を御遣しに成りませんでは、手遅ておくれに相成りまするで、御思召を伺ひに出まして御坐りまする。」

「其は大きに御苦勞であつた。那あの茶碗は是非此方へ申受けるのであるが、今は出先でまきの事であれば、代金は宿許やどぐらにて渡すであらうから、然やう承知してくれ。」

「では、是からお供を致しまするで？」

「其は餘り早急はやきうではないか。見る通の次第で、今と申して直すくに中座ちゆうざも致しかねる。此方が求めると極つたか

らば、然やうに急ぐ事は有るまい、今晚中に代金は遣す。」

「いえ、もうお促せき申しまするでは御坐りませんが、灯あかしつの點ちき次第に船が出まするので、もう程も御坐りません、其に間に合せませんでは、先方へ對して濟みませんので。」

「おゝ、然やうな都合か。」

と侍は暫く思案の體でありましたが、

「然らば直様すくさま同道致さう。」

扱御主人今日は計らず罷出で、お手厚い御響應に預り、千萬忝く存じまする。折角のお心入では御座るが、お聞の通の仕合で、甚だ不調法ぶてうはふでは御坐るけれど、是にてお暇を申したい。いづれ又近日改めて御意得るで御坐らうが、手前宿は日本橋筋平野屋傳才方にッほんばしすぢひらのやでんさいかたで……………」

と歸かへりしたく支度しだくを爲るから、喜右衛門慌あわてて、

「暫くお待ち下さいませるやうに。今日は無理にお引留め申上げまして、折角御寛ごゆづくりと遊あそばして下されう處を、未だ何のお愛想あいそも御坐りませぬ内にはや御立とは餘に不本意に存じまする、唯今承りましたるだけの御

茶碗割

茶碗割

用で御坐りまするならば、金子は私より一時お取替申上げまして、後刻お歸りに成りまして御返し下されう
なら子細御坐りませぬ、どうか然やう遊ばして。」

と喜右衛門は此の珍客に今起るゝのは手裏の玉を取るゝやうなもので、甚だ名残惜い、況や大に待さうと云
ふので、先から壘所は上を下へと修羅場の如き騒動、漸く吸物が出たばかりの所であるから、如何にも此の心
盡が徒爾に爲たくないたのであります。因で、考へて見れば、何處の馬の骨やら、牛の尻やら判らぬ一見の客
に、物も言はせずぼんと大枚百八十兩の金を用立てると云ふのは、實に大した馳走であります。既に此の
心意氣は山海の珍味を方丈に列ねたるにも過ぎて居りまする、客たる者の身に取つては幾許嬉しいか知
れませぬ。人を待す事を馳走と言ふ。馳せ、走る、と之を字に書くのは、慌てゝ酒屋へ駈付けると云ふので
もなければ、馬に乗つて質屋へ飛ばすのでも無い。馳は心を馳せ、走は體を走らすので、何が可からう、
彼が可からうと、客の喜びさうな物を心配するのが、馳であります、其から此處には無い、那處には在る
と駈回るのが走で、先づ其程に誠を籠めたのでなければ、馳走とは謂はれぬのであります。
左に右に「志は松の葉」で、茶漬でも馳走なれば、常盤屋の仕出しでも冷遇の場合がある。此の百八十

兩の如きは蓋し馳走の極意で、一言の間に感謝の意が溢れて居りまする。なか／＼の葉」どころではない、
堅木の太い、善く乾れたのを百把も積上げて、何ならば檜の木片も有りまする、直に持せて差上げませうと
言ふが如き者。

「いや、仰は如何にも忝なう存するが、金子の義では有り、差支と申しても宿許に参れば、直に用辨致す事
で御座れば、始ての参會に然やうな無様の事を願ふも心苦しく存する。」

「いえ／＼、些の當座の御用で御座りますればこそ、私方もお間に合せたいので、どうぞお心置を無く。」
と段々言を遷して言入れるから、彼の侍も甚だ喜んで、

「過分なる御志、何とも申し様も御座らぬ。然らば宿許に歸りまするまで、暫時拜借を相願ひ、寛々御馳走
に預りまする。」

と云ふので、喜右衛門は手代を呼びまして右の金子を取寄せ、

「然やうなれば是に百八十兩、どうぞ御檢を。」

「是は忝なう御座る。」

茶碗割

と侍は會釋したばかりで、金子には手も觸れませんが、其儘小八郎へ下渡して、

「茶碗は持參致したな。」

「是に御座りまする。」

と包の内から紫の革紐を掛けた、桐の糸紵の好い時代に古びた箱を其に差置き、確に金子を受取つて、唐物屋は引退る。

扱件の箱を傍に引付けたる侍は、改めて喜右衛門に向ひ、

「申遅れて居りましたが、手前は此の茶碗の儀に就き、此度生命を受けて、罷り上つたる者で、則ち日本橋通平野屋傳才方に逗留致す、四國は伊豫松山の藩中にて荻谷主馬と申す。之を御縁に以後は別して御入魂申しまする。」

と始て名乗を致す。然う聞くほど、人品骨格と云ひ、衣類大小其他の身の廻と云ひ、有弊に重々しき容體は、天晴一廉の知行取、と愈よ尊敬して、十分の款待を致しました。彼の侍も頗る満足の體で、夜に入るまで酌交し、さてお暇を申さうと云ふ際に、

「然ればお立替の金子は、是より立還つて即刻持せ遣します間、茶碗は其節引替に使者にお渡し下さるやう。それまで暫時是は御預を願ふ。」

と念の入つたる挨拶でありますから、喜右衛門は、

「其の御會釋に及びませうか。お大事の御品で御坐りますれば、どうぞお持歸りを願ひまする。」

「いや、然やうのものでは御座らぬ。此方も金子を借用致し居るのであれば、其證を留めて參らねば氣が濟まぬと申する者。」

「然やうでは却つて迷惑を致しまする。決して御念には及びませぬゆゑ是非お持歸りを願ひまする。」

と喜右衛門は飽くまで辭退を致したが、彼の侍は侍で又義の堅いことを黷しい、如何にしても置いて歸ると言張つて、件の箱に手を掛けぬのであるから、お醫者に出した菓子ではなし、紙に包んでお供に渡すと云ふ譯にも行かぬ、喜右衛門も困却致した。

「然やうに思召さるゝならば、お言に従ひまして暫時御預り申し上げます。些と之に御封印を遊ばしまするやうに。」

茶碗割

茶碗割

「成程、封印を致す？ お堅い事で御座るのう。」

「何も念の爲で御座りまする。」

「然らば封印を。」

と懐紙を裂いて、紙縷を作り、革紐の結口に屹と封印を致して、其へ差出す、喜右衛門受取つて、

「寢と御預り申しました。」

「何分頼入りまする、金子の儀は歸り次第持參致させまする、手前も未だ十日程は逗留致し居れば、旅籠の

事とて何の風情も御座らぬが、お暇ならば兩三日中には是非平野屋方へお訪ね下さらぬか、又色々國の話ども

お聴に入りたい。其節はお鶴さまをお伴れあるやうに必ず、お待ち申す。」

と諺々も言を番へ、馳走の禮を述べて、荊谷主馬は小松屋を出ました。

喜右衛門は器用に用立てた金ではあるが、大枚百八十兩と云ふのであるから、如何に兩替屋で其底の者は轉

つて居るにも爲よ、又其人を疑ふのではないが、今に持つて来るか、来るかと心待に待つて居たが、急には

沙汰も無い。待つ間に夜は更けて、はや店の者も寝る刻限に及んだが、未だ何の使も無い。喜右衛門も少は

心配の状で、何爲た事であらうと獨り考へながら、口にも出さず、其夜は黙つて寐たまりました。

翌日となる、朝の内には持つて来るかと待つたが午になつても沙汰無し、午後にはと頼たのみにして居ると使ら

しい影も見えずに其日は暮れたのであります。昨夜の時刻に成つたら便たよりが有るかも知れぬと、段々待つた

が忪ほけるばかりで、其夜も空しく初夜を過ぎて、店の戸を叩く者も無い。

宿は日本橋筋の平野屋傳才と知れて居るのであるから、翌朝左ひだりに右みぎ是へ問合とひあはせに遣つた。程無く其者は急迫

を歸つて來ました。

「へい、唯今行つて參じました。」

「お、奈何かの。」

「居りません！」

「あ、お留守か。」

「始から居りませんので。」

「何だと！」

茶碗割

茶碗割

「侍なんでは全で平野屋には居りませんで御坐します。」
 「一昨日のお武家は平野屋には居ないよ。」
 「旦那、那は遣られたので御坐います！」
 「まあ、静に爲ろよ、」

と喜右衛門は何事も胸に納めて、更に騒ぎません。店の者は皆聞いて居るから、直に奥へ知れる。奥へ知れると勝手の者が聞付ける、忽ち家内中の騒動に成つて、嗽々と喧しく其地でも此地でも其の噂、喜右衛門は是か身を研られるよりも辛い、乳母の不束を散々に譴り懲した其舌の未だ乾かぬのに、己の爲出来した此の失體は何事であらう、何千兩と云ふ金を扱ふ、大店の束をも爲る者がやみく／＼這麼甘手に乗つて、御丁寧に頭を下げて、酒を飲んで、百八十兩騙られたと有つては、第一奉公人の示が付かぬ、又世間へ對して小松屋の暖簾の箱が悉皆落ちる、今更百八十兩は惜まぬが、何にも易へられぬのは此の無念と、喜右衛門は陰に齒咬を作して悔んだのであります。

此事が世間へ聞えては小松屋の恥、外に思ふ子細も有れば、誰も吃と口外せぬやうにと、店の者を

茶碗割

始め下男下女にまで固く言合めた。美事善行は轍く門を出るのではない、新聞の雑報に二號見出を置いて持筆しても、讀者は餘り見ませぬ。水破抜の記事でさへあれば六號活字の傍訓無しでも拾讀にするのが人情で、際す事は能く顯はるゝ。二日と経たぬ間に町内に知れ渡つて、其より其へと傳はり、半月ばかりの間に、はや大阪中の大評判と成つて、酔興な徒はわざ／＼小松屋の前まで見に来る。火事場ではなし、別に其の跡を見たからとて、敢て参考になるのではないが、餘り閑さうでもない者が來ては覗き、覗いては通る。店に居る者も甚だ辛い、喜右衛門の心苦しきは謂ふに謂はれぬ。

其は未しもであつたが、市中の評判が餘り高いので、道頓堀の或座では早速之を狂言に仕組み、兩替屋奥座敷の場など云ふ繪看板を上げたうと云ふもので、喜右衛門も之には青息を噴いて弱りました。

此の芝居が蓋の啓かぬ先から夥しい人氣で、寄ると接ると何處でも此話であつたから、いざ初日となると、待兼ねた見物は永當々々と詰掛けて、日増の大人、大當であります。其の繁昌に引替へて小松屋の家内は宛然火の消えたやうに、親類忌中とも謂つべき爲體、是は其苦で、直に鼻の先で可恥いやら、悔しいやらの我が失錯を、毎日どんちゃん囃し立てられるのであるから、是は誰でも懣がずには居られませぬ。大いに懣

茶碗割

いたる喜右衛門は或日窃ひそかに手代の久七を奥へ呼んで、

「いや、實に此度は面目も無い仕合しあはせ、お前方にも合せる顔も有りません。私は從來然これまでもしたる手柄を爲出来した事も無い代には、又世間の物笑になるやうな不問ばまも働きませんでした。今度と云ふ今度ばかりは私が一生の手曠てあかりあんなこと。那麽事なんなこで沸湯にわかを飲される喜右衛門でも無いに、ちよろり遣られたのは冤むさが魅ましたとでも謂ふのでありませう。思へば思ふほど私は如何にも無念でなりませぬ。」

「仰せば御尤で御座いますが、私思ひますには、是が渡世の事で、喻たとへば贖金にせがねを擲なまされたと申すやうな手落で御座いますれば、其こそ小松屋の家名に疵きずも付き、且那樣のお顔にも關りませうで御座いますが、今度の事はお子様のお可愛いから起りましたので、能く申しますが、子ゆゑの關、何處の親御も子供衆には目も鼻も無いのが人情にんじやうで御座いまして、有繋さすがに商賣とは申しながら、善くも巧みたくました彼奴等きやつらの新手しんて、有様を申しますれば、私は感心致して居りますので、此手に繋かりません世間の親は一人も無からうと存じまするくらゐで御座いますから、人は如何やうに申しませうとも、お店の暖簾たてに關るの、且那樣のお名折なせに成るのと、決して那樣譯そんなわけのものでは無からうと心得こころえます。そりやも御無念では御座いませうが、仰おほせの通り些ちよつと通り

冤むさと申すのが魅またので御座いますから、夜前の夢だと思召おもじて、さらりと御忘れ遊あそびましたが宜う御座います。」
「深切こころに好く言つてくれました。然しかうも諦あきらめても見たが、猶なほ且無念は無念なので、奈何にか此の腹癒はらいが爲たいと思ひます。」

「出来ませすれば結構で御座いますけれど、相手が御座いませんが、」

「ごめ其處です。」

「全く其處で御座います。」

「相手は無しでも可いから、奈何なか成るまいかと色々勘考かんかうしました。」

「御思案が御座いました。」

「先づ有りませんよ。」

「是は然なやうで御座いませう。」

「因そで段々考へましたが、恁か云いふのは奈何なであらうか、是非是はお前に頼まれて貰ひたいのだが、」
「如何やうな事だ。」

茶碗割

茶碗割

と言ふ久七を傍近く寄せて、喜右衛門は小聲に有間叫いたのであります。時々笑を含んで頷いて居た久七、磁と横手を拍つて、

「可う御座いませう！」

「まゝ遣つて見やうさ。」

「づんと遣ります、私大遣り、是非遣ります、兩肌脱ぎで一番是は遣ります。面白う御座います。」

「面白くではありませんせん、睨り頼みますよ。」

「睨りお受合申しました。では、早速明日にも。」

「明日、可からう。」

「然やうなら明日。」

「睨り頼みますよ。」

「睨と承知致しました。」

如何なる事を思ひいたのやら、主従謀し合せて別れました。

話次分頭彼の芝居は今日が十日目と云ふ見頃であるから、一層客脚が附いて、咩と充つた餘が舞臺の上に

推出して見物する始末、實にすばらしい景氣であります。

然る處、今序幕が濟んだ幕間に、見物を推分けく、旋て舞臺に顯れた一人の男が有る。

羽織袴を着けた町人體の若者、見れば、左の小脇に何やら抱えて居る。其が見物の正面に突立つたから、之

を見ざる者なし、怪まざる者無しで、

「他は何だらう。」と言ふ内に、

「親玉！」と四方から聲が掛かる。餘り親玉でもない。

「口上でせうか。」

「口上にしても頓智機な恰好だ。」

唳々と離し立てゝ有間は鳴も鎮まらぬのであります。其時彼の男聲を張揚げて何やら喋る様子を見たか

ら、見物も有聲に音を歛めました。

「御見物衆に申し上げますが、私儀は當狂言に仕ります小松屋喜右衛門手代に御座りまするが……。」

茶碗割

茶碗割

と名乗りかけると、彼地からも、

「小松屋！」 此地からも

「小松屋！」 或は

「大當り！」 「百八十兩！」 などと又騒ぐ。

「今日は主人の申付に因りまして、各様の御覽に入れたき品を持参致しまして御座ります。即ち是なる箱の中は彼の騙賊めが百八十兩の抵當に小松屋へ被けましたる茶碗に御座ります。其の始末は狂言にて御覽の通り聊か相違御座りませぬ。主人も此儀を不面目に存じまして、筒様なる耻は人様に知れませぬやうにと、極内分に致し置きましたる處いつか世上の取沙汰と相成り、最早今日では狂言にまで仕組れまして、御存じ無いお方は御坐りませぬ仕儀と有りますれば、今更包み隠すも無用と心得まして、然やうなれば騙賊めが種に致しましたる此の茶碗、見るもなかく口惜く、恨忘れ難く存じまするに就き、不如一思に御見物の中へ持出して、割つて捨てよとの申付に御座ります、唯今是にて打割りまするゆゑ、何卒何方様にも御覽下さりまするやうに。」

と久七は辯舌爽に口上を述べて、件の箱の中から目通りに茶碗をへ出したので、是に狂言よりも大分面白いのであるから、半疊を打込む者も無く、場内は森と皆息を凝して一生懸命に手代の手元を眺めて居りました。

茲でと久七が力を籠めて舞臺に投付けたる茶碗は、粉微塵と成つて、影も留めず八方に飛散つたり、續いて打付けたる箱を踏割り、蹂躪るのを見た群集は、覺えず哄とばかり響動を作つて、大受に受けたのでありする。其間に拔出した久七は頭から氣氣と湯氣を出して、蒸し立ての番頭で御座いとも何とも言はずに急いで小松屋へ還りました。是は實際湯氣も黒煙も出たに違無いと想はれる。嘗て公衆の前に出て二度三度ならず喋つた言の有る吾人が、恚して口演をするのですら、相應に吭が乾いたり、聲が頭へたり爲るのであるから、兩替店の手代が、一足飛に舞臺に上つて、大入と云ふ見物の前に立つて、口上を述べた上に茶碗まで割つて見せるのは、容易ならざる大役、精進潔齋で勤める程の者であつたのを、首尾好く爲了したのは非凡な事でありました。此夜久七恐くは大熱を發したかも知れませんが、

さあ、此事が又直に大阪中の評判となつて、這麼珍らしい事は芝居開闢以來曾て無いと云ふので、其の二

茶碗割

三日は狂言よりは此噂の方が盛で、見ない者までが其日に行合せたやうな事を言つて、驚いたのは其の茶碗の碎片が飛んで来て、丁度私の眉間に中つたなどと慙云ふ人氣に成つて来ると一犬實に吠えて、萬犬虚を傳ふる、誰も現に見て来たやうな話を致しまする。

或る夕暮の事一僕を召連れて、衝と小松屋の店に入つて来た立派なる侍、見ると、扮装は全然先と變つて居るが、紛う方なき荻谷主馬であります。久七駭いた。

「へい、是は。」

「先日は何かと御厄介に相成つた。御主人はお宅かな。」

「へい、宅に居りますので御座います。」

「此方が参つたと通じてくれますやう。」

「へい、承知仕りました。どうぞ暫くお待を願ひまする。」

久七は奥へ駈入る。荻谷主馬は店頭みせまはに腰を掛けて威儀殿ゐぎおとせに控へて居ります。主喜左衛門早速其へ出て参りまして、

「是はく、荻谷様で御座りましたか、好うこそのお出で、どうぞ先づ是へお上り遊しまして。」

「いや、先頃はお手厚い御饗應に預つて、何とも忝なく存じます。扱早速ながら、申譯の御座らんのは、彼の借用の金子直様持せ遣しまする筈の處、那より立還りますと、折から國元よりの急飛脚で御座つて、其場より京へ上らねば相成らぬ火急の用事、いや、もう蓑一服致す間もなく發足致すやうな次第、混雜の砌みぎとして何等の御挨拶も得申さず、尤も折返して罷り下る都合ゆゑ、委細は其節御意得る心底で御座つたが、何彼と存外に手間取り、漸く今日立歸りました。

右の次第で御座れば、お約束を違へた段は幾重にも御用捨下さい。便すまはち金子は是に持參致したに因つて、彼の御預り置を願うたる茶碗、唯今お渡し下さるやう。」

と袱紗を披いて内なる金子を主の前にづいと差置いた。喜右衛門之を取上げて睨と改めて見れば、立派な小列で百八十兩、請取申處實正也であります。

「確に。」と喜右衛門は挨拶をして、側に居ります久七に些と目顔で知らせると、直に立つて奥へ行つたが、恭しく茶碗の箱を持つて顯れました。喜右衛門受取つて、之を荻谷主馬の前に直して、

茶碗割

「然やうなれば、お預りの御品、御封印をお調べ下さりまして。手代の久七眼を皿の如くにして、彼の侍如何なる顔を爲るか、と瞬も爲ずに視て居る。侍は箱を出れた時にぞつくり来たのであるが、更に封印を改ると、喜右衛門の顔を横目に熟と視て、速に打て變つた不機嫌。」

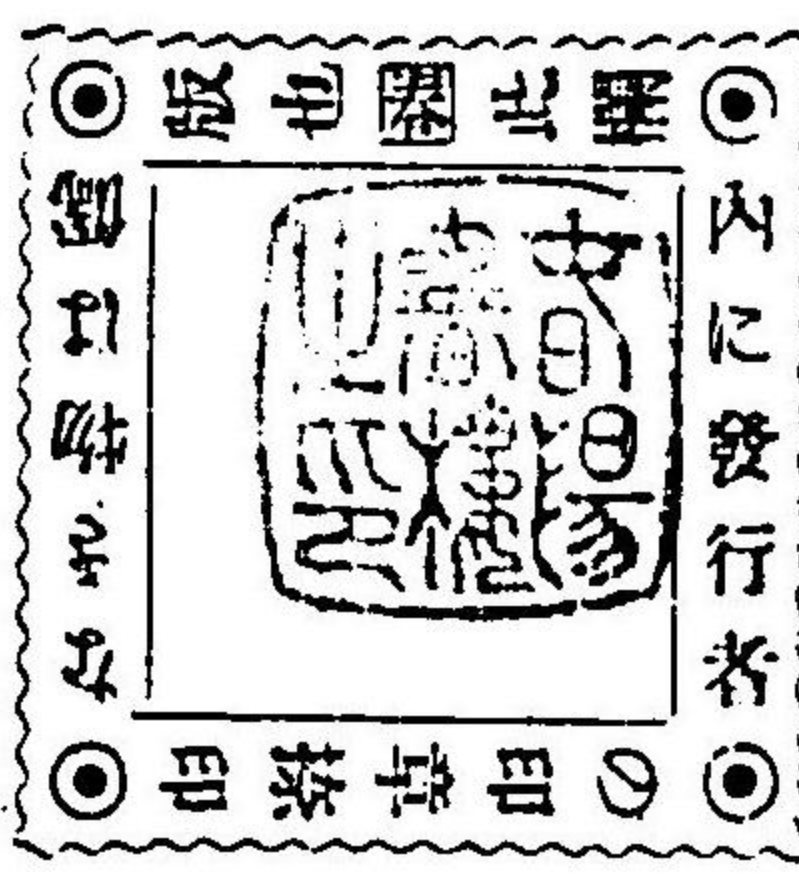
「はッ。」

「其方は物持が善いのう。」と云ふなり右の箱を抱えて、侍は拂然と出て行つた。

茶碗は壊して亡いと来たら、直に強請掛けて最百二十兩も豪奪らうと云ふ是が二段返しの新しの手、其呼出を掛けた喜右衛門の分別袋の底は知れぬ。と是又大阪は謂ふに及ばず、五畿内一圓に名譽の取沙汰でありました。〔團水作晝夜用心記之一章〕

(をばり)

紅葉集 第四卷 終



明治四十三年四月二十日印刷 紅葉集 第四卷
 同 年四月二十日發行 (實價金壹圓參拾錢)

著 者 尾 崎 紅 葉
 發 行 者 和 田 靜 子
 印 刷 者 神 谷 岩 次 郎
 印 刷 所 東京印刷株式會社

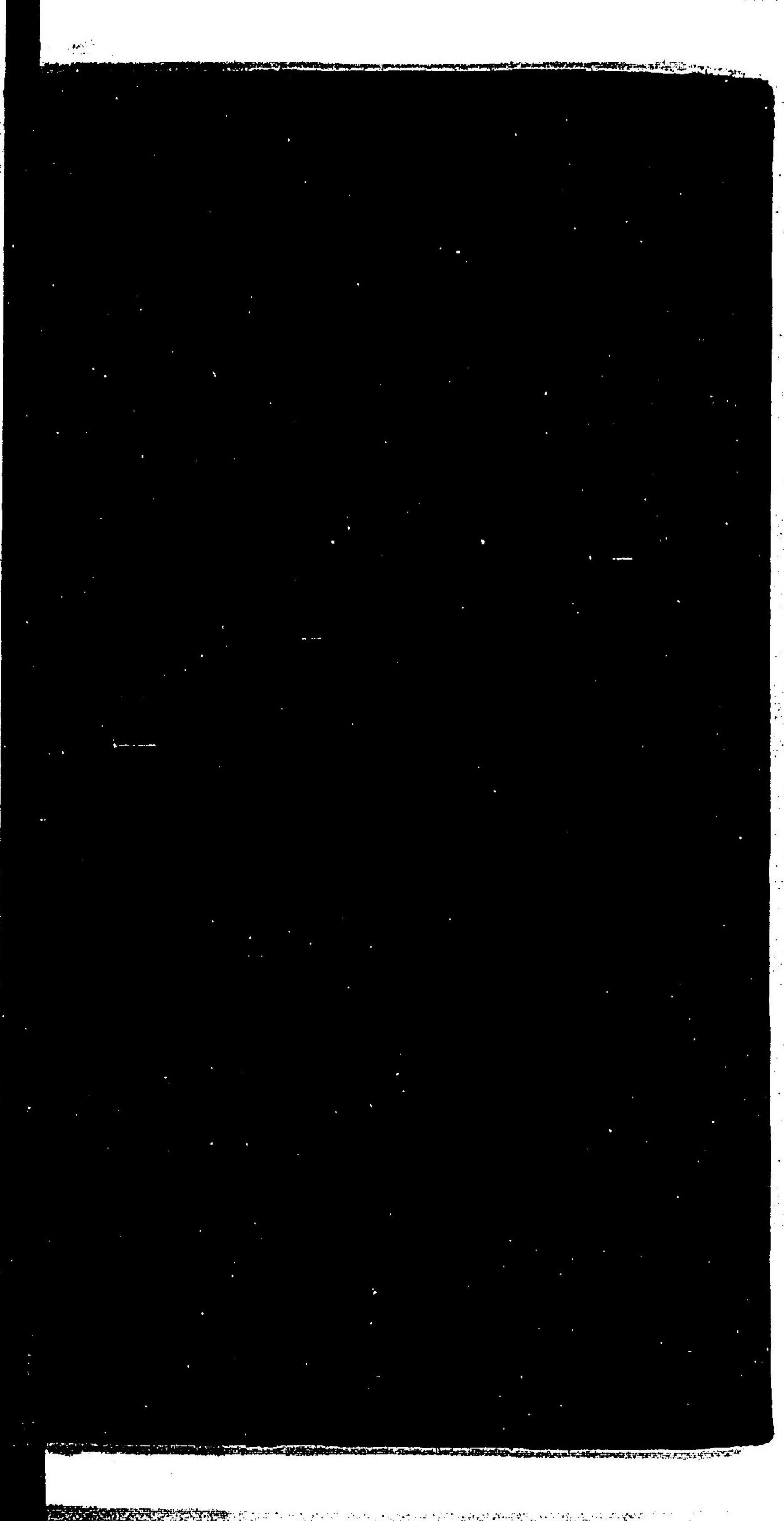
發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地
 春 陽 堂
 電話本局 五一一
 振替口座 東京一六一七

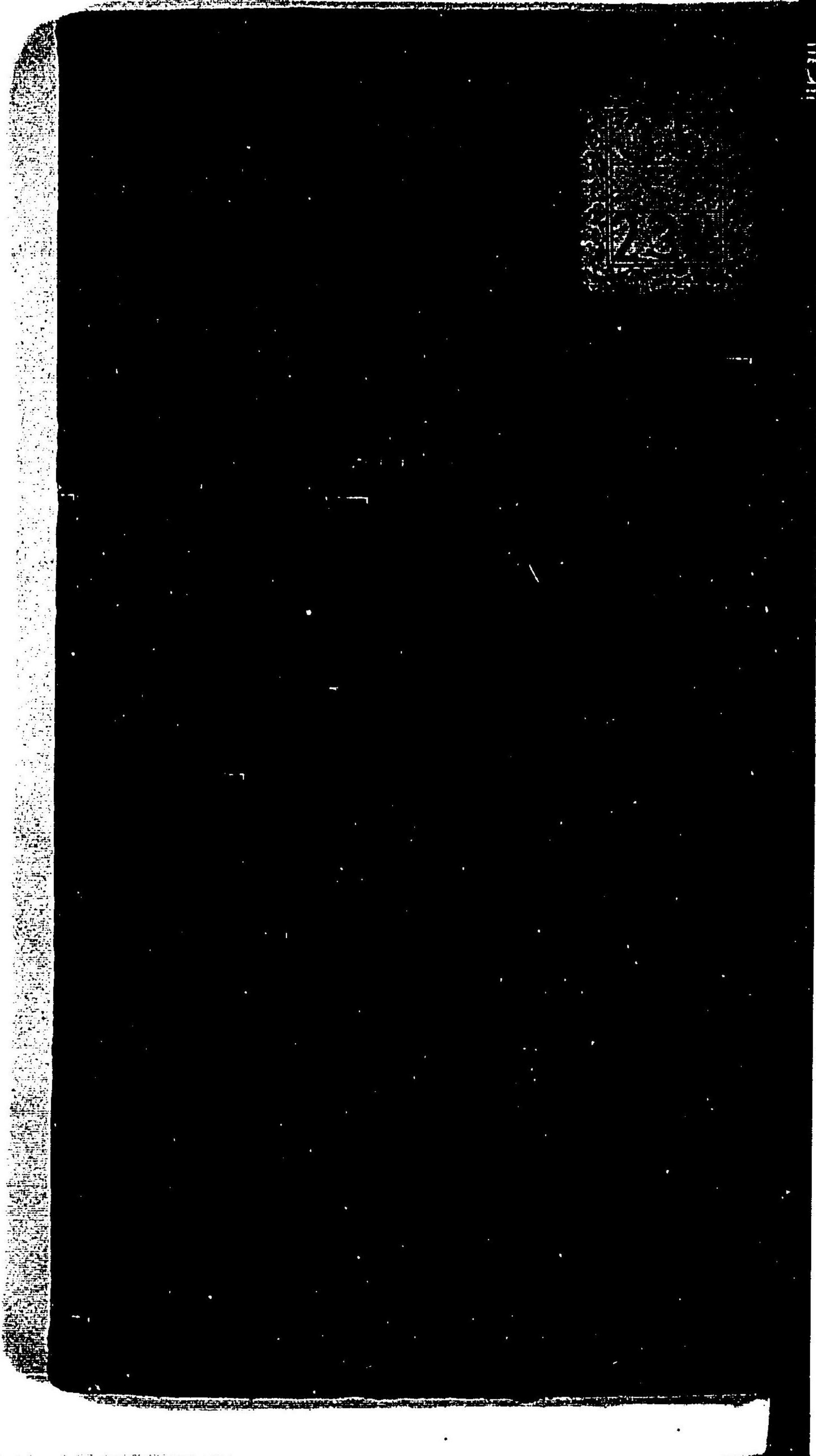
紅葉集 目第一卷	妻	人	三
	夏小袖 夏瘦	關東五郎 紫	伽羅枕 冷熱 心の闇 男心

紅葉集 目第二卷	三ヶ條、 安知歎貌林	西洋娘氣質、 浮木丸	鷹 料 理	多情多恨、 隣の女
			銀 不言不語	

紅葉集 目第三卷	花ぐもり、 戀の病、 伽羅霞療養 物語	偽金、青葡萄、此ぬし、猿枕 文ながし、手引の糸、女の顔	紅 毒 饅 頭	八新色 重懺悔、 命の安賣 千箱の玉章
			蚊わか 帳かれ むおぼ ろ玉子	

35
232





11311

